

令和元年度

自己点検・評価書
(学校評価報告書)

附属幼稚園

1 附属幼稚園の現況

(1) 学校名

大阪教育大学附属幼稚園

(2) 所在地

大阪府大阪市平野区流町2-1-79

(3) 学級数・収容定員

6級(1学年2級) 収容定員150人 (1学級30人 ただし3歳児は16人と14人)

(4) 幼児・児童・生徒数

147人 (男児75人 女児72人)

(5) 教職員数

園長(併任) 1人、副園長 1人、主幹教諭 1人、教諭 6人、養護教諭 1人、非常勤講師 2人
事務職員 1人、臨時用務員 1人、スクールカウンセラー 1人
栄養士 2人、調理師 1人

2 附属幼稚園の特徴

豊かな自然環境の中で身近な人々とのあたたかい触れ合いや、生き物たちとの日々の関わりを通して、やさしく、あたたかく、思いやる心が育つことを願っている。

幼稚園生活の主人公は幼児であり、幼児の思いや願いを大切に生活を中心としている。幼児は遊びを通して様々なことを学んでいる。遊びこそが幼児の生活そのものであり、今日の幼児の姿から明日の生活が作り出されていく。常に幼児の今の姿を出発点として、個々の育ちや発達状況、その時期にふさわしい遊び(生活)が展開されていくよう、努めている。

また、昭和23年より保護者手作り給食を実施しており、約70年間にわたって受け継がれている。子どもたちに手作りの温かいものを食べさせてあげたいという願いと共に、食の安全や衛生、アレルギー対応など、時代の変化に応じた給食作りを目指している。

3 附属幼稚園の役割

- (1) 学校教育法に基づく幼稚園教育を行う。
- (2) 幼稚園教育の理論と実践に関する研究を行う。
- (3) 本学学生の教育実習を行い、その指導を行う。
- (4) 地域社会における幼児教育の振興に寄与する。

4 附属幼稚園の学校教育目標

「すこやかに あたたく 遊びに生きる子ども」

○ 3歳児・・・喜んで幼稚園へ来る子ども

生後わずか3年しかたっていない子どもであるが、一人の人間としてすばらしい力を持ち、一人一人がその子らしさを秘めている時期である。この1年をゆったりと大好きな先生に寄り添い、自分の好きな遊びに没頭し、明日も大好きな幼稚園に行こうと思うことが、これからの保育年限における健やかな育ちを期待する上で何よりも大切なことであるとする。

○ 4歳児・・・友達を見つけて、幼稚園の生活を楽しむ子ども

友達の存在に心を揺り動かし、幼稚園では「いろいろな友達がいる」「一人より友達と一緒に生活が楽しい」「友達と関わり合って育つ」等の体験をしながら、幼稚園生活の楽しさを味わい、思う存分遊ぶ子どもに育つことを願っている。

○ 5歳児・・・友達と心を通わせ、様々な生活に熱中する子ども

心身ともにたくましく、知的好奇心もぐんと増す時期である。試行錯誤を繰り返しながら全力で幼稚園の様々な生活に熱中し、一人でも、みんなとでも「やったね」という成就感を味わい、友達と力を合わせて楽しい園生活をつくり出す子どもに育つことを願っている。

5 附属幼稚園の学校教育計画

1 人間尊重の教育

幼児一人一人の人権を守り、将来豊かな心で、生きる喜びを感じ、差別を克服し、困難に立ち向かう、しなやかでしたたかな心と体をもった人間の育成に努める。

2 基本的な生活習慣の形成

幼児の行動を見守りながら、必要な時期に教師自身がモデルとなって援助したり励ましたりしながら、幼児が園生活にとって必要な行動であることを自覚し、自ら身に付けていくことを願っている。

3 道徳性の芽生え

園生活の中で、自分以外の友達や身近な人との関わりを通して他人の存在に気付き相手を受け入れ、尊重する気持ちを育てることから始まると考える。また、園内の豊かな自然環境や飼育動物との共生の中で、命の大切さを感じると共に思いやりや責任感など人間性の根幹にふれる体験を大切にしよう努めている。

4 身近な物の扱いと基礎的な技術や技能の習得

幼児の生活が、より楽しく、より心地よく、より便利に、より目的に向かって充実するために必要な遊具や用具がある。これらの扱いを幼児自身が必要と感じた時に逃さず身に付けていくことと、3年ないし2年間の園生活の中で出合うことができるよう、指導計画の中に位置付けることとしている。

6 附属幼稚園の平成30年度 重点目標(評価項目), 具体的な取組内容(評価指標)・評価結果

評価の基準

自己評価		学校関係者評価	
A	高いレベルで達成できた	A	とても適切である
B	達成できた	B	おおむね適切である
C	一部達成できなかった	C	あまり適切でない
D	ほとんど達成できなかった	D	適切でない
		E	判定できない

学校教育目標	「すこやかに あたたく 遊びに生きる子ども」
学校教育計画	1 人間尊重の教育

本年度の重点目標 (評価項目)	具体的な取組内容 (評価指標)	自己点検評価			学校関係者評価		学校関係者評価を 踏まえた改善策
		達成状況	改善点	評価	意見・理由	評価	
(1) 一人一人の幼児 が自分らしさを発揮 し、多様性を認め合 える集団を育てる。	一人一人の幼児の 気持ちに寄り添った 関わりを教師が心掛 け、幼児の行動の意 味を知り、必要な援助を 行う。また、未就園児 や高齢者など年齢や 立場の違った人と関 わる機会を多くもつ。	幼児の一人一人の行動の意味を 探り、肯定的に捉えることで、幼 児が安心感をもって園生活を送る ことができた。 未就園児や高齢者と関わる機会 は定着してき、相手に心を寄せた り思いやる態度を見せるなどする 姿が見られたが、反対に園内での 異年齢との関わりは少なかつた。	一人一人の幼児の行動の意 味の捉え方は教師によって差 が生まれる。教師間で幼児の 捉え方を共有できるように、 日々の話し合いを行ったり、 実践事例を検討したりしてい きたい。 教職員間の連携は学年間だ けでなく他学年や他の教職員 とも密に行えるように、定期 的な会議だけでなく、短時間 で負担なく行えるように工夫 したい。	B	未就園児園庭開放、高齢 者との交流など、今までよ り画期的に行われている。 地域に開くことにより、附 属幼稚園をもっとよく知 ってもらえるのではない か。	A	多様性については違いを 認め合っていけるように大 人がモデルを示していける ようにしていきたい。 次年度も互いを認め合え るよう一人一人に寄り添 った保育を実施すると共 に、多様な人と関われる機 会を多くもっていきたい。
(2) 教職員間の情 報交換を密に行 い、幼児の内面の 育ちについて共通 理解する。	日常的に幼児の姿 の情報交換を行う。ま た、その折に、行動の 変化だけでなく、内面 の変化について話し 合うようにする。						

学校教育目標	「すこやかに あたたく 遊びに生きる子ども」
学校教育計画	2 基本的な生活習慣の形成

本年度の重点目標 (評価項目)	具体的な取組内容 (評価指標)	自己点検評価			学校関係者評価		学校関係者評価を 踏まえた改善策
		達成状況	改善点	評価	意見・理由	評価	
(1) 必要感をもって、生活習慣を丁寧に行える幼児を育てる。	発達年齢に応じて、なぜ必要かを分かりやすく指導する。また、教育課程を見直しながら、一人一人に合わせた環境構成や援助の在り方を考える。	生活習慣が身に付くために年齢に合わせた環境を構成することを心掛けることで、自ら身の回りの始末などを行うことが幼児に定着してきている。また、昨年度作成した教育課程をもとに実践していくことで、3年間を見通しながら、その時期に必要な生活習慣を身に付けていけるように教師が意識することができた。	生活習慣面は幼稚園だけで身に付けていくことは難しい。幼児が心身共に自立していくために、必要な援助を保護者と連携しながら行っていきたい。		特になし		
(2) 園内の環境を見直し、安全・安心な生活を送るために必要な習慣を身に付けられるようにする。	園内の環境を見直し、園舎改修工事期間も含めて、常に安全な環境を維持するように努める。	園舎改修工事により、登園場所や遊び場所に変更があったり、生活場所の制限があった。その都度教職員、保護者が一体となり、幼児が安全に生活できるか話し合ったり、それをもとに改善したりしてきた。大きな混乱もなく安全に過ごすことができた。	改修工事を契機に園内環境を改めて見直す機会となった。次年度は健康、衛生面に重点をあて、環境の見直しや生活習慣を幼児に身に付けられるようにしていきたい。	A	園舎改修工事に関しては、幼児の安全面や教育内容を保障するために様々な努力をしていることが分かる。安全面に関しては、地域の力も借りながら行っていけばいいのではないかと。	A	園舎改修工事をきっかけに気付いた園の環境の良さや課題について、教職員間で共通理解しながら、さらに安全な環境を整えていきたい。 衛生面についても、新たな視点を持ち、環境を見直していくと共に、幼児一人一人が自分で意識して、生活習慣を身に付けられるようにしていきたい。

学校教育目標	「すこやかに あたたく 遊びに生きる子ども」
学校教育計画	3 道徳性の芽生え

本年度の重点目標 (評価項目)	具体的な取組内容 (評価指標)	自己点検評価			学校関係者評価		学校関係者評価を 踏まえた改善策
		達成状況	改善点	評価	意見・理由	評価	
(1) 幼児が友達と関 わる中で葛藤やつま ずきを体験し、最後 まであきらめずに自 分の思いを出した り、相手の思いに気 付いたりできるよう にする。	一人一人の幼児の 育ちを丁寧に見取 り、友達と関わる中 で、自分の思い通り にいかないことや、 我慢しなければならない体験を積み重ね られるようにする。 うまくいかない時 にも諦めずに関わる ように教師も根気強 く関わる。また、集 団としてどのように 育てていきたいかと いうことを教師自身 も意識し、学級経営 をしていくようにす る。	自己主張が強い幼児には、相 手の気持ちを落ち着いて聞く機 会を多くもてるよう心掛けた。 また、逆にいざこざを避けよう とする幼児には、まずは自分の 思いを相手にしっかり出せるよ うに、日々の保育で励ましてい った。いろいろな出来事を該当 幼児だけで話し合うのではな く、クラスの皆で話し合う機会 をもつことで、第三者の幼児も 自分のこととして考え、集団と して高まっていくようになった。	一人の幼児の葛藤やつま ずきを集団の課題として教師が 意識することで、集団として 高まることにつながった。一 方、つまずきや葛藤を経験す ることが少ない幼児もいるの で、教師が意識してそのよう な状況をつくり出すことも必 要だと感じる。そして、最後 には達成感や成就感を味わえ るように援助していきたい。	B		A	幼児同士のいざこざが起 きたり、つまずいた時に最 後まであきらめない粘り強 さが少ない傾向もあるの で、教師自身がもっと根気 強く関わり、達成感を味わ ったり成就感を味わったり できるようにしていきたい。
(2) いろいろな人と 関わり、人と関わる 楽しさを味わう。	異年齢の友達や他 校種の人、地域の人と 関わる機会を設け、自 分の周りにはいろい ろな人がいることに 気付けるようにする。	他校種の人との関わりでは小学 1年生との交流は積極的に行 うことができた。未就園児や地 域の高齢の方と触れ合う機会に ついては継続することで互いに関 わりを楽しみに待てるようにな ってきつつあると感じる。しか し、今年度は園内の異年齢の開 わりが十分ではなかった。	教師が意識しているいろい ろな人と関わる機会を設けてい くことが必須である。外の交流 にはばかり目がいくのではな く、園内の異年齢同士の関わり についても、どのような方 法で行っていくとよいのか、 また日常的に行えるようにす るためにはどうすればよいか 考えていきたい。		各年齢の人と関わる力 が育ってきていることが よく分かった。地域との 交流もとても積極的に行 っていると感じる。様々 な年齢の人と関わること で、幼児の人と関わる楽 しさを味わう体験につな がっているのではない か。		園内の異年齢の交流につ いては、もっと柔軟に各教 員が考え、これまでやって いたことを踏襲するのでは なく、取り組んでいきたく い。

学校教育目標	「すこやかに あたたく 遊びに生きる子ども」
学校教育計画	4 身近な物の扱いと基礎的な技術や技能の習得

本年度の重点目標 (評価項目)	具体的な取組内容 (評価指標)	自己点検評価			学校関係者評価		学校関係者評価を 踏まえた改善策
		達成状況	改善点	評価	意見・理由	評価	
(1) 幼児の主体的な遊びを大切にし、遊びの育ちを追いながら、遊びが深まったり広がったりする要因を探る。また、その中で、幼児の発達に合わせた環境や援助について考える。	幼児の遊びに視点を置き、遊びを丁寧に読み取りながら、その遊びが広がったり深まったりする要因を園内研修会や実践事例の検討を通して探る。そしてその要因をもとに、各年齢の発達に合わせた、環境や援助を考えることで、一人一人に幼児が確実に基礎的な技術や技能を習得していけるようにする。	遊びが広がったり深まったりする要因を探ることで、各年齢に必要な環境や援助の在り方が見えてきた。それをもとに丁寧に保育実践することで、一人一人の幼児が発達にふさわしい技術や技能の習得をしていくことにつながった。	遊びの読み取り方は教師一人一人違いがある。互いに意見を交わしながら多様な幼児の理解の仕方や遊びの見取り方につながるようにしていきたい。また、教育課程をもとに、発達に合わせた技術や技能については教職員皆で共通理解していきたい。	B	幼児の遊びの様子から保育をつないでいくことを大切にしていることがよく分かった。時間的なゆとりをもち、遊びが広がったり深まったりする姿を大切にしていると感じる。教師の遊びの見取りがあって、働きかけがある。教師の見取り方によって、遊びへの援助が変わってくる。そしてそれをきちんと記録していくことが大切ではないか。	A	園内研修会、実践事例の検討会だけでなく、遊びについて考える機会を増やし、環境について学び合うことで、発達に合わせた技術や技能の習得につなげていきたい。 また、日々の記録については、負担感なく継続できる記録の在り方を今後も検討していきたい。

